

九州天皇家論
8章 日本書紀神武天皇

日本書紀神武天皇の真実

日本書紀・神武天皇

真の東征



「吉備」から何処へ向かったのか

神武は、戊午年の春の二月丁酉朔丁未(11日)に、東征に出発した。「吉備國」を出た神武軍勢は、「難波の崎」を通過した。この海は浪が速かった。故に、ここを「浪速」と云った。それが訛って、「難波」というようになった。関門海峡は潮の流れが速い。神武紀の「難波」とは関門海峡の海である。「難波崎」とは若松区高塔山である。

神武軍は彦島西山町を出て、右手に若松区高塔山を見て、関門海峡を北東に進んでいった。神武軍は「速吸門」を通過し、「浪速の渡り」を通過した。「浪速の渡り」とは壇ノ浦の渡りである。ここまで神武が進んだ海は関門海峡である。

壇ノ浦を通過した神武はどこに向かったか。瀬戸内海を進んだのか、あるいは、周防灘を南下したのか。ここで古事記も日本書紀も、いきなり、「河内國の草香邑の青雲の白肩津」に飛ぶ。私たちは一瞬、神武の姿を見失う。この間の海路のヒントを何か書いてくれていると願う。

吉備國－難波崎－浪速國－河内國－草香邑－青雲白肩津－孔舎衛坂－草香津－茅渚の山城水門－名草邑－狭野－熊野－神邑－熊野－荒坂津－菟田－穿邑－吉野－菟田－國見丘の戦い－忍坂邑－層富縣－高尾張邑－畝傍山
(日本書紀東征路)

吉備國－速吸門－浪速の渡り－青雲の白肩津－血沼海－紀國－男之水門－熊野村－吉野河－宇陀－忍坂－畝火の白檮原の宮
(古事記東征路)

しかし、この間の進路は、記紀とも自明のことだったのである。故に何も書かなかった。神武は、当然といえば当然の場所に向かっていたのである。



「吉備」から「安藝」へ

神武がめざした場所は「安藝國」である。神武は「安藝國」で東征を決意した。そして、東征の準備のため「吉備」に渡った。3年の準備の後、再び、神武は「安藝國」に戻ってきたのである。「安藝國」が神武東征の前線基地であった。こうして、神武は全軍を鼓舞して、周防灘を一路南下して、目指す「河内國」へ突入していった。

「安藝」から「河内國白肩津」へ侵入

この「河内國の草香村」を流れる川の港が、「靑雲の白肩津」である。さて「白肩津」とはどこか。「白肩」とは「白潟」であろう。神武が突入したさまを日本書紀は詳しく書いている。神武の言葉は生々しく記録されている。

三月の十日に、遡流而上（かわよりさかのほ）りて、経（ただ）に草香邑の靑雲の白肩之津に至ります。夏四月の九日に、皇師兵を勅（ととの）へて、歩より龍田に趣く。而して其の路狭く嶮しくして、人並み行くことを得ず。乃ち還りて更に東（ひがしのかた）膽駒山（いこまやま）を踰えて、中州（うちつくに）に入らむと欲す。時に長髓彦聞きて曰く、「夫れ、天神の子等の来ます所以は、必ず我が國を奪はむとならむ」といひて、則ち盡（ふつく）に属（したが）へる兵を起こして、徴（さいぎ）りて、孔舎衛坂にして、與（とも）に會（あ）ひ戦う。流矢有りて、五瀬命の肱脛（ひじはぎ）に中れり。皇師進み戦ふこと能はず。天皇憂へたまひて、乃ち神策を沖杵（みこころにうち）に運（さだ）めたまひて曰はく、「今我は是日神の子孫にして、日に向ひて虜を征つは、此天道に逆れり。若かじ、退き還りて弱きことを示して、神祇を禮ひ祭ひて、背に日神の威を負ひたてまつりて、影の隨に壓ひ躡みなむには。此の如くせば、曾て刃に血らずして、虜必ず自づからに敗れなむ。」とのたまふ。衆（みな）曰さく、「然なり」とまうす。是に、軍中に令して曰はく、「且は停れ。復な進きそ」とのたまふ。乃ち軍を引きて還りたまふ。虜亦敢へて逼めまつらず。却りて草香之津に至りて。盾を植てて雄誥したまふ。

神武が遡り、上陸した「白肩津」が存在した川はどの川か。神武は敗戦の理由を述べている。

今我は是日神の子孫にして、日に向ひて虜を征つは、此天道に逆れり。若かじ、退き還りて弱きことを示して、神祇を禮ひ祭ひて、背に日神の威を負ひたてまつりて、影の隨に壓ひ躡みなむには。此の如くせば、曾て刃に血らずして、虜必ず自づからに敗れなむ。

我々は日に向かって敵を攻めた為、敗れたのだ。ここは一旦退却して、今度は敵の背後に廻り、太陽を背にして戦おう。そうすれば、敵は自ずと敗れるであろう。古事記にも同様の五瀬命の言葉がある。

この場合、神武が日に向かって攻めたという方角は西向きである。日に向かうというだけでは、東向きもあり、西向きもある。だが、企救半島は東側が海である。従って、神武は東の海側から上陸したことになり、神武が進んだ方角は西向きである。

- (1) 川は安藝國（門司大積）の南に存在する。そして「遡流而（かわよりさか）上りて」と書いているように、この川は海から直接遡る川で、しかも東西に流れる川である。
- (2) この川は急流ではない。神武の時代（紀元前一世紀）の手漕ぎの舟でさかのぼることが出来る緩やかな流れの川である。

「白肩津」とは櫛毛川の湊

企救半島で、東西に流れる川は、吉志の櫛毛川である。「白肩津」とは櫛毛川の湊である。「白肩津」は、現在で言えば、恒見である。「白肩津」に上陸した神武一行を待ち構えていたのが長髓彦である。

「孔舎衛坂」での戦闘で、神武の兄が矢を受けて傷つく。そして、神武が引き返した港が、「草香津」である。「草香津」は「草香邑の港」の意で、「草香津」と「白肩津」とは同じ港である。神武は「白肩津」に上陸して、「孔舎衛坂」まで進み、再び、「白肩津」に戻ってきた。古事記は「白肩津」に上陸する際、長髓彦が急襲してきたので、再び、川を下って海に出た、と書いてい

る。結果は同じであるが、古事記は「孔舎衛坂」の戦いを省略している。神武が上陸した「白肩津」とは現在、恒見八幡神社が建っている場所である。



櫛毛川
神武上陸地点 白肩津

神武を迎え撃った長髓彦はこの港の支配者だった。櫛毛川を遡った神武が下船したと思われる所に恒見八幡神社がある。祀っているのは応神天皇など神武の末裔であるが、元々この神社はこの土地の王、つまり長髓彦の王宮で、後に応神を祀ったのであろう。



神武上陸地点に建つ
恒見八幡

「白肩津」に上陸した神武が目指した場所は、「中洲」だという。中洲とは、本来、川の中にできた洲を意味する。この中洲に弥生国家（弥生集落）が存在したのであろう。故に、「中洲（うちつくに）」と表記されたのである。



「熊野」は吉志

3月10日	河内國・草香邑・貴雲白肩津
4月9日	孔舎衛坂－草香津
5月8日	茅渟の山城水門
6月23	日名草邑－熊野・神邑－熊野・荒坂津

戦闘の地となった「孔舎衛坂」とは吉志のどの坂道にあたるのか、確定はできない。「草香津（白肩津）」から脱出した神武が次に上陸したのは、「茅渟（ちぬ）の山城水門」である。そして、「紀國」の竈山まで進む。兄、五瀬命がここで亡くなる。兄を埋葬して「名草邑」へ進む。ここで、「名草戸畔」（村の長か）を殺す。「狭野」を越えて、「熊野の神邑」に至る。その後、海に戻り、暴風に会う。次兄の稲飯命は嵐をしずめるため、海に入り、三番目の兄、三毛入野命は、「常世郷」に去ってしまう。三人の兄を失い、一人となった神武は、なお、東征を続ける。やがて、「熊野・荒坂津」に着く。「荒坂津」も港である。ここで、「丹敷戸畔」（同じく村長か）を殺す。

ここまでの神武の行路はわかりにくい。この行路は敵の背後に廻るために、小さな港へ上陸し戦闘、また、次の港へ上陸し戦闘ということの繰り返しであったと思われる。

古事記はこれらの戦いは省略し、簡単である。兄、五瀬命を「紀國の竈山」に埋葬して後、神武軍は「熊野村」に入ったと書く。この時、神武を襲ったのは食中毒である。

爾に神倭伊波禮毘古命、忽（には）かに遠延為（をえま）し、及び御軍も皆遠延為（をえま）て伏しき。

ここで、神武一行は、突然倒れる。にわかに、「遠延為（をえま）し」と書いている。これは嘔吐であろう。現在でも、嘔吐の時の表現は「オエッー」である。神武一行は食中毒か何かで嘔吐して倒れたのであろう。日本書紀は「熊野の荒坂津」で、「時に神、毒気を吐きて、人物咸（ことごとく）に瘁えぬ。」書く。その危機を救った人物が「高倉下（たかくらじ）」という人物である。「何故、来たか？」と問う神武に、彼は答える。

自分は夢を見た。天照大神と高木神が建御雷神を呼んで『葦原中國はお前が平定した国である。今くだって行け』と命令した。しかし、建御雷神は、『私が行かなくても、この刀を高倉下の倉に落としましょう。その刀を天つ神の御子（神武）に与えよ』と言った。その夢に通りに、朝起きて倉の中を見れば刀があったのでここに持って来た。

日本書紀もほぼ同じである。「葦原中國にいる神武が苦しんでいる。」「彼らを助けよ」と天照大神、高木神が建御雷神に命令した。建御雷神は、國譲りの時に、天照大神の使いで出雲國に降った武将である。

この夢は神武が上陸した「熊野（荒坂津）」は、まだ、天照大神の影響が残る土地、いわば、「大八洲」の統治内での出来事であることを示唆している。ここまで神武はまだ祖が切り開いた「大八洲」王朝の領国内で戦っていたのである。



熊野「三重県熊野」比定の非理

「熊野」の近代比定を考えてみよう。

「熊野・神邑」 - 「荒坂津」 - 「菟田・穿邑」 - 「吉野」 - 「畝傍山」

これらは全て関西に比定されている。現代関西地図でこれらの地名を追えば下のようになる。だが「熊野・神邑」から「宇陀」までの神武の足取りを地図上に記すことは困難である。下図の行路はこのようになるだろうという推測である。どのような行路を描いても到底納得できるような合理的な行路は作れない。

「荒坂津」は三重県紀勢町とされる（日本古典文学大系頭注）が、神武がここまで遠征する妥当な理由を見つけることはできない。そもそも大阪・孔舎衛坂の戦いで敗れた神武軍がいかに敵の背後に迂回すると云っても「新宮」まで行くのは度が過ぎる。これでは自分がどこにいるかということすら判断できなかったと思われる。

「八咫鳥」の説話を元に大台ヶ原に神武像が立っている。「八咫鳥」は大台ヶ原から菟田までずっと案内したというのである。本来は企救半島の「熊野」で道に迷った神武一行が「大鳥」の飛んでいった方向に山を降ったという単純な話である。鳥が飛んでいった方向に人里があると見たのである。この説話は、現実とそんなにかけ離れた話ではない。古来鳥と人は仲良しである。鳥の後を追って山を降っていったら、「吉野河」の「河尻」に出た。「吉野河」とは現在の「竹馬川」である。この説話には全く問題はない。

日本書紀の神武東征路をこのように関西と考え比定したのは近代の研究者である。日本書紀編者に責任はない。



「菟田下縣（吉野）」とは小倉南区

時に、天皇、適く寐せり。忽然にして寤めて曰はく、「予（われ）何ぞ若此（かく）長眠しつるや」とのたまふ。尋ぎて毒に中りし士卒、悉に復醒めて起く。既にして皇師、中洲に趣かむとす。而るを山の中嶮絶しくして、復行くべき路無し。乃ち棲連（しじま）ひて其の跋み渉かむ所を知らず。時に夜夢みらく、天照大神天皇に訓へまつりて曰く、「朕今頭八咫鳥を遣す。以て郷導者としためへ。」とのたまふ。果して頭八咫鳥有りて、空より翔び降る。天皇の曰はく、「此の鳥の來ること、自づからに祥き夢に叶へり。大きなかな、赫なるかな。我が皇祖天照大神、以て基業を助け成さむと欲せるか。」とのたまふ。是の時に、大伴氏の遠祖日臣命、大來目を帥いて、元戎に督將として、山を蹈み啓け行きて、乃ち鳥の向ひの尋（ま）に、仰ぎ視て追ふ。遂に菟田下縣に達る。困りて其の所至りましし處を號けて、菟田の穿邑と曰ふ。時に、勅して日臣命を譽めて曰はく、「汝處ありて且勇あり。加能く導の功有り。是を以て、汝が名を改めて道臣とす」とのたまふ。（神武紀）

苦戦の「熊野」の神武を救ったのが、頭八咫鳥である。山を降った所を「菟田下縣」と書いている。この「縣」がどこか、日本書紀では分からないが、古事記は別の説明をしている。この記述が、この「縣」の場所を特定する。

古事記は、「山を降ったら、吉野河の河尻に出た」と書いている。河尻とは河口のことである。

其の八咫鳥の後より幸行でませば、吉野河の河尻に到りましし時、筥に作せて魚を取る人有りき。（古事記）

神武一行が、鳥のあとを追って行くと、吉野の川の河口に出た。古事記の「吉野河口」と日本書紀「菟田下縣」を重ねると神武が「熊野」の山から降った「吉野河口」は、当時、すでに「菟田下縣」という名の行政区であったということになる。「吉野河口＝菟田下縣」である。

この「菟田下縣」から神武は「菟田縣」へ向かっている。そして日本書紀は、神武が「菟田」から「吉野」を訪れたと記している。日本書紀では、ここで初めて「吉野」という地名が現れる。当然、古事記の「吉野」と日本書紀の「吉野」は同じ土地である。

是の後に、天皇、吉野の地を省たまはむと欲して、乃ち菟田の穿邑より、親ら輕兵を率いて、巡り幸す。（神武紀）

古事記には、神武が「吉野」を訪れたという記事はない。古事記では、神武は「熊野」の山から降った時に、「吉野川」の河口に出た。日本書紀では神武は「菟田菟田の穿邑」から「吉野」見学に行った。「吉野」の地名が登場する場面が異なるが、お互いを補うため、ここでは、古事記と日本書紀を併せて読んでみよう。

古事記・・・神武は熊野の山中から吉野河の河口に出た。そして宇陀（菟田）へ進んだ。

日本書紀・・・神武は熊野の山中から菟田下縣に出た。そして菟田縣に進んだ。その陣中、輕兵を伴って吉野を訪れた。

神武は「熊野」山中で迷った。その時、一羽の大きなカラスが麓に飛んで行った。神武一行はその方向に里があると見て、山を降った。すると、「吉野河」の河口に出た。その土地の名前は「菟田下縣」と云った。神武はそこから「菟田縣」まで進軍し、陣を張った。その陣中に、神武は輕兵を引き連れて、再び「菟田下縣」の「吉野河」を見学に行った。「菟田下縣」と「菟田縣」は隣接する。当然であろう。この「吉野河」とはどの河か。むろん、奈良吉野の川ではない。奈良吉野の川に神武が出たと仮定すれば、そこは吉野川の川上となる。古事記では神武は「河尻」（河口）に出ている。これは古事記のまちがいはない。事実である。この記述が「吉野」特定

のヒントを私たちに与えてくれる。

「水湊（たぎ）つ吉野川」とは小倉南区竹馬川

神武は「菟田穿邑」から「吉野河」の河口を再び訪問した。神武はこの河口に格別の興味を持っていた。故に、再訪したのである。神武の人間味が表れているが、神武が河口に見たかったものとは何か。「吉野河」とは竹馬川である。神武は竹馬川の河口に生じる名高い現象を見にきていたのである。竹馬川の河口にはその流れと周防灘の満潮によって特別な現象が生じる。神武が見た現象を人麿も見ている。人麿はそれを「水湊（たぎ）つ滝の都は」と詠っている。

吉野の宮に幸しし時、柿本人麿の作る歌（万葉集巻1-36）

やすみしし わが大王の 聞し食（め）す 天の下に 国はしも 多（さは）にあれども
山川の漬き河内と 御心を 吉野の國の 花散らふ 秋津の野辺に 宮柱 太敷（ふとし）
きませば 百礪城（ももしき）の 大宮人は 船並めて 朝川渡り 船競ひ 夕川渡る この
川の 絶ゆることなく この山の いや高知しらす 水湊（たぎ）つ 滝の都は 見れど
飽かぬかも

反歌 見れど飽かぬ 吉野の川の 常滑の 絶ゆることなく またかえり見む

持統天皇が「吉野の宮」を訪れたときに人麿が歌った歌である。この歌は「吉野の山」の歌ではない。「吉野の川」の歌である。「吉野の川」は「水湊（たぎ）つ」川だった。水が湊つとは、逆巻くという意味である。



「水が逆巻く」とは小倉南区の曾根干潟に流れこむ竹馬川が干潟に押し寄せる満ち潮とぶつかって逆巻いて流れる様をいう。九州天皇家の「吉野の宮」はこの名所に建てられていた。人麿が「吉野の國の花散らふ秋津の野辺に宮柱太敷（ふとし）きませば」と歌ったのは九州天皇家の「吉野の宮」である。神武は竹馬川の逆巻く波を見に来ていた。人麿は神武が「菟田」の陣中に「吉野」の河を再訪したことを知っていたのであろうか。知っていたのかもしれない。「またかえり見む」には神武故事が念頭にあったと思わせる表現である。

神武紀の「菟田下縣」とは竹馬川の河口に存在した弥生集落である。河口の小倉南区下吉田には多くの遺跡が存在する。古来開けた港町だったと思われる。

遺跡は縄文時代後期中葉の鐘崎期の集落跡である。企救半島の南部、周防灘に面する舌状の丘陵斜面標高7～20メートルに位置している。昭和55年1月、民間宅地造成により約1万6000平方メートルに縄文遺跡が確認され、約3000平方メートルが調査された。調査において、竪穴式住居跡3基、土壇11基、柱穴群、埋甕1個と広範囲にわたって遺物包含層を確認した。住居跡より土器のほか石皿、磨石、磨製石斧が出土。多量の獣骨、魚骨、植物種子炭化物、黒曜石の屑を検出。総数503点の石器が発見されており、器種には、磨石25、石皿53、磨製石斧114、打製石斧46、礫器13、石鏃25、石匙10、剥片石器33、石錐3、石錘66、石棒4、砥石8、敲石5等。

(<http://www.geocities.jp/kikunosato2005/sub18.html>)

菟田「國見の丘」の戦いは小倉南区長野城

（古事記） 宇陀（兄宇迦斯を殺害）－兄師木・弟師木－忍坂の大室（八十建一族を殺害）－登美毘古－岐火の白梶原の宮

（日本書紀）

6月 菟田下縣に至る。

8月 菟田縣の魁師（ひとごのかみ）兄獺、弟獺を召す。抵抗した兄獺を殺害。

冬10月1日 （赤銅）八十梟師を國見丘で破る。

八十梟師の一族を忍坂邑の大室の宴会に招き、酒宴の最中に撃つ。

11月7日 兄磯城彦を攻める。兄磯城彦を墨坂付近で破る。

12月4日 長髓彦を撃つ。長髓彦、和睦を申し入れるがこれを拒否、殺す。長髓彦の主、饒速日命を召し抱える。

翌年2月20日 土蜘蛛、層富縣の波 丘岬の新城戸畔、和珥の坂下の居勢祝、臍見の長柄丘岬の猪祝を撃つ。また高尾張邑（葛城）の土蜘蛛を撃つ。

3月7日 岐傍山の東南の橿原の地に宮を造る。

神武が侵入した土地は、「菟田下縣」「菟田縣」と云われていた。「縣」とは古代九州に存在した行政区名である。神武の対戦した国家は、この時すでに、「縣」という行政制度を確立していた超先進的な国家だったのである。「菟田縣」、「菟田下縣」は、もはや、天照大神の加護が及ばない完全な他国であった。「菟田縣」の戦いでは、「國見の丘」が戦場となった。この丘が「國見の丘」と呼ばれたのは、神武がその31年に、國見をしたからである。神武が「倭國（やまと）」に都を開いて15年、諸国の巡幸に出かけた。そして、東征の最大の激戦地であったこの丘に登った。この國見以降、丘は「國見の丘」と呼ばれた。それ以前、この丘が何と呼ばれていたか、神武の歌にこの山が現地の名前が登場する。

楯並めて 伊那佐の山の 樹の間よも い行きまもらひ 戦えば 吾はや飢ぬ 島つ鳥
鵜養が伴 今助けに来ね

「國見の丘」は、この土地では、「伊那佐の山」と呼ばれていた。神武はこの丘に立って有名な感想を述べている。「蜻蛉の聲舐め如く」と、トンボの交尾に喩えたのである。神武が「國見の丘」から見たのは竹馬川の流れである。竹馬川は湾曲して流れる。その湾曲した姿をトンボの交尾に喩えたのである。竹馬川が流れる小倉南区が「菟田縣」である。この行政区には首長がいた。「猯（実は勝であろう）」兄弟である。弟の「猯」は神武に従ったが、兄の「猯」は神武に抵抗して殺されてしまう。だが、彼らは「菟田縣」の長官に過ぎなく、「縣」を支配する本国が存在した。その国が「倭國」である。訓は「キコク」であろう。この「倭國（キコク）」の王が神武の最強の敵であった。この王との戦いが神武東征のハイライトである。その攻防が「伊那佐の山」であった。

時に、弟猯（おとうかし）又奏して曰さく、「倭國（やまとのくに）の磯城邑（しきのむら）に、磯城の八十梟師（やそたける）有（はべ）り。又高尾張邑（たかおはりのむら）に、赤銅（あかがね）の八十梟師有り。此の類（ともがら）皆天皇と距（ふせ）き戦はむとす。臣、ひそかに天皇の為に憂へたてまつる。今當に天香具山の埴（はにつち）を取りて、天平瓦を造りて、天社國社の神を祭れ。然（しかう）して後に、虜（あた）を撃ちたまはば、除（は）らひ易（やす）けむ」とまうす。
（日本書紀・神武天皇）

日本書紀は「倭國」を「ヤマトノクニ」と訓んでいるが、この訓みは後付けである。当時の呼び名では「キコク」である。「キコク」の王の名前は、「赤銅（あかがね）の八十梟師（タケル）」と「磯城（しき）の八十梟師（タケル）」である。二人は兄弟である。古事記では「兄師木」「弟師木」と書かれている。「伊那佐の山」に立て籠もっていたのは、この赤銅のタケルと兄の磯城のタケルである。

二人の王の名前は「タケル」である。「タケル」という名前がよく知られているのは、「倭健（ヤマトタケル）」である。この名前は彼が討った熊襲の王から贈られた名前である。熊襲の王は伝統的に「タケル」を名乗っていた。神武が戦った「キコク」の王も「タケル」と名乗っていた。神武が対戦した相手は熊襲の王である。

熊襲とは何か。熊襲は神武の時代よりはるか昔から古代九州を支配した王族である。出自は中国「楚」の王家一族で、紀元前3世紀、故国「楚」の滅亡によって國を離れ日本列島に移住してきた「楚」の王家一族である。代々「熊」を名乗り、また「タケル」と名乗った。伊邪那岐命の國生みの時代にはすでに「熊襲の國」が存在していた。神武が戦った熊襲もこの一族である。熊襲の王が立て籠もったのが「伊那佐山」である。この戦いはこれまでの平野での戦いとは様相を異にする山岳戦であった。熊襲の王は「要害の城」に立て籠もっている。神武はその山城を攻める。すでに近世の山城の攻防戦ともいえるものであった。この「伊那佐山」とはどこか。その特徴が描かれている。

9月5日、天皇、彼の菟田の高倉山の嶺（いただき）に陟（のぼ）りて域（くに）の中を瞻（お）望りたまふ。時に、國見丘の上に則ち八十梟師（やそたける）有り。又女坂に女軍を置き、男坂に男軍を置く。墨坂に炭（おこしずみ）を置けり。其の女坂・男坂・墨坂の號（な）は、此に由りて起れり。
（日本書紀・神武天皇）

山への登山道は三つある。男坂、女坂、墨坂である。軍を配置していたのは男坂と女坂である。男坂には男軍、女坂には女軍を置いたのでこの名前となった。もう一つ、城の背後に登山道がある。ここには兵は配備しないで、熾った炭を置いていた。この坂が墨坂である。丘の攻略法を神武に献策したのは椎根津彦であった。

時に椎根津彦、計りて曰さく、「今は先づ我が女軍を遣して、忍坂の道より出でむ。虜是を見て必ず鋭を盡して赴かむ。吾は勁（つよ）き卒を駈馳せて、直に墨坂を指して、菟田川の水を取りて、以って其の炭の火に灌きて、忍（にわか）の間に其の不意に出れば、則ち破れむこと必じ也」とまうす。天皇其の策を善（ほ）めて、乃ち女軍を出して以って臨しめたまふ。虜、大きな兵已に至ると謂（おも）ひて、力を畢し相待つ。是より先に、皇軍攻めて必ず取り、戦ひて必ず勝てり。而るに介買（いくさ）の士、疲弊ゆるること無きにあらず。故

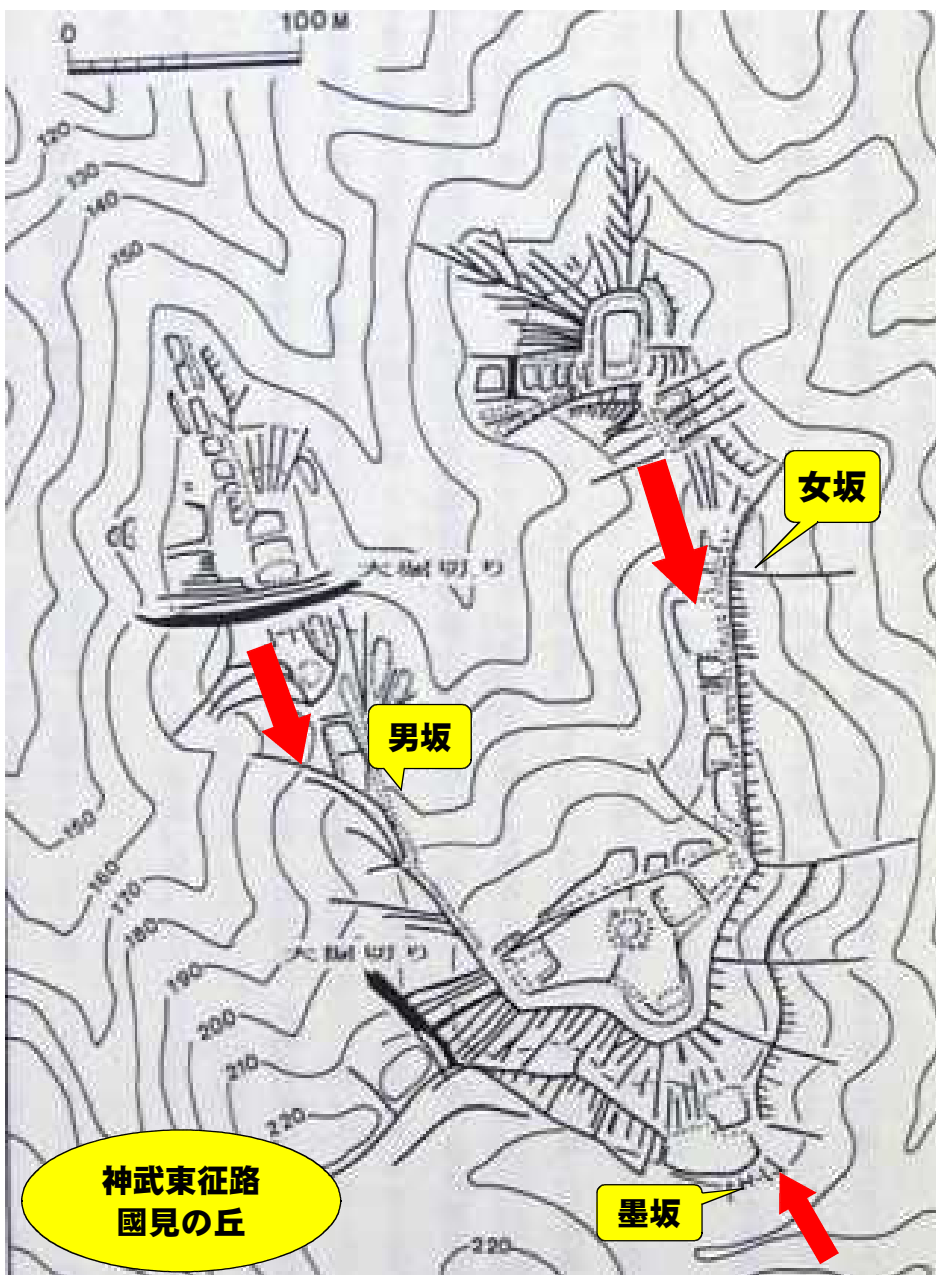
に、聊（いささか）に御謠をつくりて、以って將卒の心を慰めたまふ。謠して曰はく、

相並めて 伊那瑳の山の、木の間ゆも、い行きまもらひ、戦へば、我はや飢ぬ、
嶋つ鳥、鵜飼いが徒、今助けに来ぬ

果して男軍を以て墨坂を越えて、後より夾み撃ちて破りつ。其の梟帥（タケル）兄磯城等を斬りつ。

神武は、まず、赤銅（あかがね）の八十梟帥（ヤソタケル）を破り、続いて、兄磯城を破った。「忍坂」とは「男坂」にあたる。そこに「女軍」を向かわせて、敵に本隊が攻めてきたと思わせる。その隙に、「墨坂」に敷き詰められている炭を菟田川の水で消して、本隊の男軍が攻め上る。このような城攻めの作戦であった。

「伊那佐山」には「女坂」「男坂」と二つの登山道がある。「墨坂」の近くには「菟田川」がある。小倉南区でこのような山が存在するであろうか。



小倉南区の長野川の上流に護念寺という寺がある。このお寺の南の山が通称「城山（230m）」と呼ばれる丘である。この丘は誠に「伊那佐山」にふさわしい条件を備えている。

山頂に登る道は二本ある。また麓には川が流れている。長野川である。川の水で炭の火を消すといった状況にびたりである。

戦国時代、長野氏が城を築いているが、小倉南区を一望できる、まさに要害の地である。長野城山は神武紀の「國見の丘」に関する記述をあらゆる点で満足させる。

その長野城の見取り図が存在する。見取り図では城に通じる道は二つある。その登山道を防いでいるのが「二の丸」と「三の丸」である。「三の丸」が護る登山道が主要な入り口とすれば、神武軍のおとりの「女軍」が配置されたのが「三の丸」への道であろう。

(<http://www.geocities.jp/kikunosato2005/sub7.html>)

「墨坂」は城の背後にあったという。「墨坂」の熾った炭を消したのは麓を流れる長野川である。

神武紀の「伊那瑳の山（國見の丘）」とは標高230mの長野城山である。この丘が「赤銅」「磯城」との激戦の丘であった。神武紀の菟田とは小倉南区長野である。激戦の「伊那瑳の山（國見の丘）」とは「長野城山」である。なお、「伊那瑳」は出雲神話に登場するは地名である。



(geocities.jp/kikunosato2005/sub7.html)

「忍坂」

日本書紀は「國見丘（長野城山）」で八十梟師兄弟を破った後、「忍坂」での出来事を書いている。それは八十梟師の一族を食事招待して騙し討った説話である。酒宴の最中に立ちあがって攻撃の合図の歌を歌ったのが道臣命である。道臣命は神武一行が熊野山中で道に迷った時、鳥を追って危機を脱出した時の功労者である。道臣命が引き連れていた兵士が「来目一族」である。この一族が後の大伴氏である。長道臣命が歌を歌う。

忍坂の 大室屋に 人多に 入り居りとも 人多に 来入り居りとも みつみつし
来目の子等が 頭椎い 石椎い持ち 撃ちてし止まむ

神武は「國見の丘」で八十梟師を破ったものの、その一族は多く、神武は和睦と見せてその一族を招待する。酒宴の最中、歌を合図に「来目一族」が一斉に頭椎剣を抜いて、全員を殺す。神武はこの勝利がよほど嬉しかったのであろう。天を仰ぎて咲（わら）って、歌を詠んだ。

今はよ 今はよ ああしやを 今だにも 吾子よ 今だにも 吾子よ

今はもう、今はもう。敵はすっかり打ち亡ぼしてしまった。今だけでも、
今だけでも、わが軍よ、わが軍よ。 (日本文学大系日本書紀上頭注)

続く兄磯城との戦いも「墨坂」付近である。神武は小倉南区・長野で熊襲の王家一族と戦った。その勝利の後、やっと、宿敵、長髓彦を撃つことになる。しかし、この戦闘は勝敗がつかなかった。最後は長髓彦の主・饒速日命が降伏して兄の復讐戦は終わる。

「厩富縣」とは行橋市

神武が戦った「菟田縣（宇陀）」とは小倉南区・長野である。「忍坂」の計略もこの地域でのことである。そして、「高尾張邑」の豪族との戦いが神武東征の最終戦となる。古事記は小倉南区の激戦は記録しているが、それ以降の記録は全くない。いきなり、「畝火の白檮原宮に坐しまして、天の下治らしめしき」と結んでいる。これでは小倉南区の戦闘から「白檮原宮」即位までの経過が分からない。「忍坂」戦以降、「高尾張邑」の豪族との最終戦まで神武の行程はどのようなものだったのか。日本書紀は神武が戦った相手の名前とその居住地を簡単に記録している。

翌年2月20日 土蜘蛛、厩富縣の波多丘岬の新城戸畔、和珥の坂下の居勢祝、臍見の長柄丘岬の猪祝を撃つ。また高尾張邑（葛城）の土蜘蛛を撃つ。

3月7日 畝傍山の東南の橿原の地に宮を造る。

「菟田」での勝利の後、神武が対戦した豪族は「厩富縣」の三人である。この地も熊襲支配の「縣」だった。「厩富縣」とはどこか。この「縣」も豊かな國だったと思われる。地名がそれを表している。

神武は敵を避けて人の住まない山中を進んだのではない。神武は「熊野」上陸後、道なき道を進み、姑息な手段を用いて敵を倒したかのようなイメージを抱かれているが、そのようなイメージは神武東征を和歌山紀伊半島に比定した結果である。神武が進んだと考えられている紀伊半島、奈良の道は今でも山の中である。しかし、この想定は実際の神武東征と大きくかけ離れる。神武は名のある大道を歩み、敵に姿を見せて、第一級幹線道路を進んでいた。そして、豊かな平野部を統治していた名のある王者を相手に戦ったのである。

さて、新たな三人の敵が住んでいた場所が「厩富縣」である。「厩富」とは富が集中していた豊かな土地を表しているようである。「菟田縣（小倉南区）」からそれほど遠くない地域で、当時、豊かだったと考えられるのはどこか。

三人の王の名前「厩富縣の波多丘岬の新城戸畔」「和珥の坂下の居勢祝」「臍見の長柄丘岬の猪祝」から考えると「厩富縣」とは行橋市だったと思われる。苅田町、行橋市には「富久町」「光富」「犀川久富」「恒富八幡神社」など、「富」の付く地名が存在する。この地域には御所ヶ谷神籠石、御所山古墳、福丸古墳群、ビワノクマ古墳、八雷古墳、隼人塚古墳が存在する。三つの川が流れる肥沃な大地、ここに強大な古代国家が存在しなかったわけではない。

神武が戦った先進国家は行橋市に存在した古代国家であろう。だが、本当に「厩富縣の波多丘岬の新城戸畔」とは行橋市だったのか。王の名前を参考に、神武が戦った相手の居所を確定していこう。

和珥の坂下の居勢祝

神武が戦った三人の中の一人は、「和珥の坂下の居勢祝」である。この人物の名前が微妙なのである。「和珥の坂下の居勢祝」は今まで「[わにのさかしたのこせのはふり](#)」（日本古典文学大系・日本書紀・神武天皇）と訓まれてきた。

故に、私たちの頭の中は、「居勢（こせ）」と「伊勢（いせ）」が結びつかない。そうして、「和珥」は天理市和珥に比定されている。しかし、「居勢」は「いせ」と読むべきであろう。乃ち、「居勢祝」とは「伊勢の祝」である。「祝」とは神官の意味という。神武が戦った相手は、「伊勢神宮の神官」で、その戦場は「伊勢」である。神武は小倉南区で勝利の後、「伊勢」に足を踏み入れ、「伊勢神宮」神官と「伊勢」で戦ったという訳である。この「伊勢」は小倉南区とそんなに離れていない。当然、三重県伊勢ではない。

波多丘岬の新城戸畔

もう一人の対戦相手は「波多丘岬の新城戸畔」である。「波多丘岬」は支配土地の地名であろ

う。読みは「はたのをかさき」である。「波多の岡崎」と現代なら書くであろう。もう一人の「長柄丘岬」も地名である。「長柄の岡崎」である。この二つの地名からあなたは内陸部の地名だろうと想像するだろうか。ところが、通常は奈良盆地の地名と想定されている。

波多丘岬・・・通証・集解ともに、添下郡赤膚山（唐招提寺の西という）とする。

長柄丘岬・・・長柄は通証・集解ともに延喜神名式の葛上郡長柄神社の地にあてる。今の御所市名柄か。
(日本文学大系日本書紀上・頭注)

頭注は、奈良内陸部と想定している。だが、この比定は全くのまちがいである。この比定は神武東征路は関西という誤認の結果である。関西設定では「菟田」は奈良県宇陀である。神武は奈良県宇陀で戦い、次いで、「波多丘岬」「長柄丘岬」で戦ったという順番となるから、二つの場所は唐招提寺の近くの赤膚山、御所市と比定される訳である。しかし、この比定は名前が持つイメージとかけ離れる。

土地の名前は「波多」である。「波多」とは「波が多い」の意である。波が打ち寄せる岬のイメージである。海が近い。潮の香りがする土地でなければならない。なぜ奈良盆地の赤膚山と比定して疑わないのか。赤膚山は海ではなく山である。

「長柄丘岬」も岬である。海の側である。現在は神武の時代からすでに長い年月が過ぎているから、もはや、海岸ではなく内陸という状況も想定しなければならない。だが、その場合でも、奈良のように山を越えた盆地の中ではない。海に近く、岬の姿をした丘である。

地名はわずかに二つであるが、これらの地名が示すその場所は海の傍である。神武が戦ったこれらの豪族は海の近くに住んでいた。海の港を支配する古代国家の王だった。その住居は岬にあった。神武の進路は海の傍の道である。その海辺の道とは国道10号線であろう。神武は「菟田（小倉南区・長野）」から東海の道、国道10号線を南下したと思われる。「厩富縣の波多丘岬の新城戸畔」は、国道10号線を南下した「縣」の豪族だったと思われる。国道10号を南下した土地は行橋市である。

万葉集の「伊勢の波多」

日本書紀の記述はここまでである。探求はここで終わりとなったように見えたが、ヒントが万葉集にあった。万葉集題詞に「波多」が登場する。

十市皇女、伊勢の神宮に参赴りし時、波多の横山の巖を見て吹刀自（ふふきのとじ）の作る歌

22 河上のゆつ岩群に草生さず常にもがもな常處女にて

吹刀自未だ詳らかならず。ただし、紀に曰はく、天皇四年乙亥の春二月乙亥の朔の丁亥、十市皇女、阿閉皇女、伊勢の神宮に参赴るといへり。

十市皇女は天武と額田王の間に生まれた皇女である。十市皇女が「伊勢神宮」に参赴りし時の歌である。日本書紀（天武天皇）もこの参拝を記録している。

天皇四年乙亥の春二月乙亥の朔の丁亥、十市皇女、阿閉皇女、伊勢の神宮に参赴るといへり。

壬申の乱において天武が蜂起の際、集結地点に選んだのが「伊勢」であった。「伊勢」が天武蜂起の拠点であった。ゆえに天武は、「伊勢に逢へ」と号令をかけた。天武は壬申の乱に勝利した。そして「勝利は伊勢神社天照大神のご加護の賜である。」こう考えた天武はお礼に十市皇女と阿閉皇女を伊勢神宮に遣わしたのである。問題は「伊勢の波多」である。つまり「波多は伊勢にあった」ということになる。この「伊勢」はどこか。現在では「伊勢」といえばむしろ三重県伊勢。他にはない。当然、22番歌の「伊勢」は三重県伊勢。これが通常の理解である。だが、日本書紀のこの記事は全く新しい認識に立って読まれなければならない。

天武四年の「伊勢」参拝は三重県伊勢ではない。神武が戦った「居勢の波多丘岬の新城戸畔」の「伊勢」である。つまり行橋市である。天武四年、十市皇女の「伊勢神宮」参拝は行橋市に存

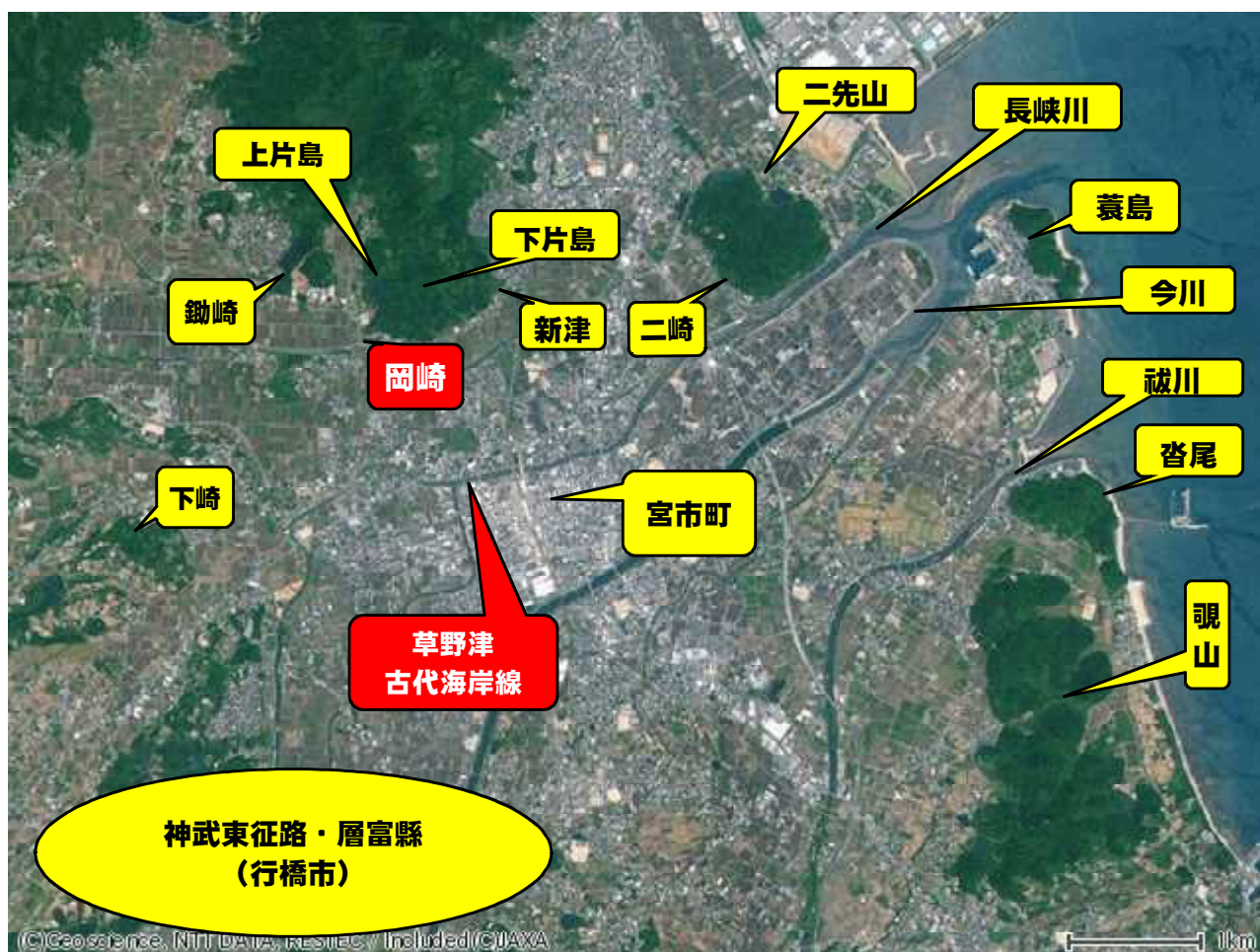
在した「伊勢神宮」への参拝だった。十市皇女の供の女性は行橋市の伊勢神宮参拝の折、行橋市の「波多の横山の巖」を見てこの歌を歌ったのである。

万葉22番歌「波多」と神武紀「波多丘岬」は同じ

神武が戦った武将の「波多丘岬の新城戸畔」の「波多岡崎」と万葉の「波多」とは同じで「伊勢の波多」である。では何故、天武の娘十市皇女は行橋市の「伊勢神宮」に参宮したのか。十市皇女は奈良から行橋市までやって来たのか。そんなことはあり得ないと思われるであろう。十市皇女は奈良から行橋市に来たのではない。天武が居た「京」からである。では天武が居た「京」とはどこか。太宰府である。天武は壬申の乱に勝利して天皇位に昇り、太宰府で全国を統治した。何故か。天武は通常理解されているように奈良天皇家の皇子ではない。九州天皇家の皇子である。それはこの章を読み終わっていただければ明らかになることであるが、神武東征とは奈良ではない。九州東北部である。したがって神武の継承者である天武も九州にいたのである。天武とは神武九州天皇家の天皇だったのである。

万葉集22番歌が歌われた天武四年、天武と十市皇女は太宰府にいた。そこが天武の京であった。十市皇女はこの京から伊勢（行橋市）へ行ったのである。

神武が戦った「居勢」の「厩富縣の波多丘岬」と七世紀天武の時代、伊勢神宮に参拝した吹刀自が詠った「伊勢の波多の横山」は同じ丘である。どちらも行橋市の「波多」である。神武の時代は「波多丘岬（はたのおかざき）」と呼ばれ、天武の時代は「波多の横山」と呼ばれた。当然のことながら神武の時代から天武の時代まで同じ王朝である。地名の変更はなかったのである。紀元前一世紀の「波多（はた）」が七世紀まで「波多（はた）」として受け継がれていたのである。



行橋市には海岸線が現在よりずっと内まで入っていた名残と思える地名がある。「岡崎」「鋤崎」

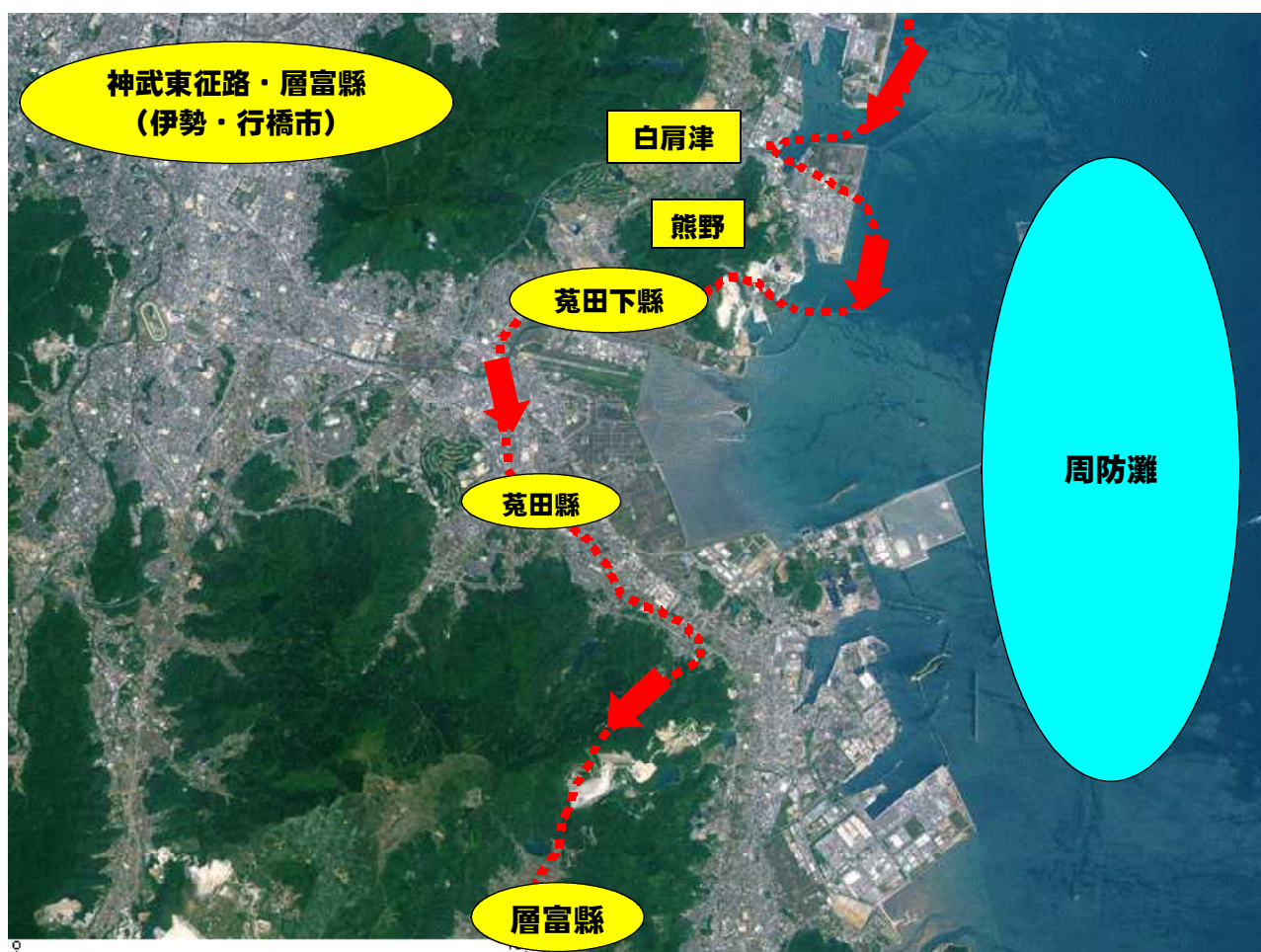
「下崎」「新津」等である。「丘岬」は「おかざき」と読む。「丘岬」とはつまり「岡崎」である。「層富縣の波多丘岬」とは、行橋市岡崎ではないだろうか。行橋市岡崎は現在は陸である。だが北の山には「上片島」「下片島」という名前が残っている。超古代はここは岬だったと思われる。この辺りが海だったというのは草野（かやの）津の記録を見ても分かる。

草野津（かやのつ）が古代海岸線

養島漁港の横を奥に進み、右折してカキ直売場の前を通り、その先を左折して細い道を行くと、長峽川と今川の河口部に出ます。周防灘からの漁船は、左手の養島漁港への水路が隔壁で確保されていて、その上に誘導灯が立っています。その向こうは長峽川河口で、対岸は苅田町の日産自動車九州工場になります。

長峽川を上って行きますと、行橋駅の北北東に草野があります。古代には、この辺りまで海岸で、草野津（くさのつ、かやのつ）と呼ばれた港でした。官人達はここから上陸して、大宰府に向かいました。その草野津の入口に養島は位置し、古代より知られた島でした。

(<http://homepage2.nifty.com/kitaqare/kinn10.htm>)



行橋市の中心街に「草野」がある。ここに湊があり、大宰府に向かう奈良の役人が、ここ「草野津」で上陸したと伝える。ここまでが海岸線だったとすれば、神武の時代の海岸線もこのあたりであったと考えていいであろう。

行橋市岡崎が「波多丘岬」と判断するには、現在の地勢では海岸線から奥に入りすぎているように思えるが、「草野津」の位置が当時の海岸線であれば、「行橋市岡崎」が浪が打ち寄せる「丘岬」であるという判断は妥当であろう。ここは背後は山に護られ、前は河に護られている地勢で

ある。侵入してくる外来者に対して直ちに迎撃できる位置である。神武との戦いも「岡崎」の近くだったのではないだろうか。行橋の王者の居所としてふさわしい位置取りである。

なお、神武が「層富縣」で戦った武将の名前の「丘岬」は愛知県岡崎に、「居勢」は三重県伊勢に、「長柄」は大阪市長柄の地名となっている。今は分散しているが、神武の時代、この三カ所は全て「層富縣」、行橋市に存在した地名であった。

九州天皇家の「伊勢」

もう少し、神武から天武までの天皇家（九州天皇家と呼ぶことにする）で「伊勢」と呼ばれた地を探求しよう。天武壬申の乱にも、「伊勢」が蜂起の拠点として登場する。歴史から失われてしまった九州天皇家の「伊勢」の復元が九州天皇家の真の歴史を復元する。

＜日本書紀・猿田彦が退いた國、伊勢＞

伊勢が初めて登場するのは、日本書紀神代下第九段、天孫降臨の直前の場面である。

是の時に、衡神（ちまたのかみ）問ひて曰はく、「天細女、汝為ることは何の故ぞ。」といふ。対して曰はく、「天照大神の子の所幸す道路に、如此居ること誰ぞ。敢へて問ふ」といふ。衡神対へて曰はく、「天照大神の子、令降行すべしと聞く。故に、迎へ奉りて相待つ。吾が名は是、猿田彦大神」といふ。時に天細女、復問ひて曰はく、「汝や將我に先だちて行かむ。抑我や汝に先だちて行かむ」といふ。天細女、復問ひて曰く、「汝は何処に到りまさむぞや。皇孫何処に到りましまさむぞや」といふ。対して曰はく、「天神の子は、當に筑紫の日向の高千穂の觸峯に到りますべし。吾は伊勢の狹長田の五十鈴の川上に到るべし」といふ。

「伊勢」は神代にすでに現れている。「天孫ニニギは、筑紫日向の高千穂の觸峯に降臨すべし」と、猿田彦は云う。そして、自分は「伊勢の狹長田の五十鈴の川上に到る」と述べる。天孫が降臨した「高千穂」とは企救半島足立山である。では、猿田彦が退いた「伊勢」はどこか。この伊勢は三重県伊勢ではない。猿田彦が隠居した「伊勢」は九州天皇家の伊勢である。



小倉南区中貫本町に「鈴石」で有名な荘八幡神社がある。祭神は応神天皇、神功皇后で、神社は国道十号線貫から少し南に位置する。現在では、幹線道路から外れた場所に位置しているが、

国道十号線がない時代には、この神社の側を通る古道が小倉南区から荻田へ通ずるメイン街道だったと思われる。



その古道の側に小さな石の仏？がある。その石には、猿田彦の名前が見える。天孫降臨を受けて猿田彦は「伊勢の國」に降っていった。その道は小倉北区から小倉南区を通り「伊勢（行橋市）」へ続く道だったと思われる。荻八幡神社の側を通る古道を通して猿田彦は「伊勢」へ向かったのであろう。ここには超古代が生きている。

＜伊勢國風土記の神武天皇＞

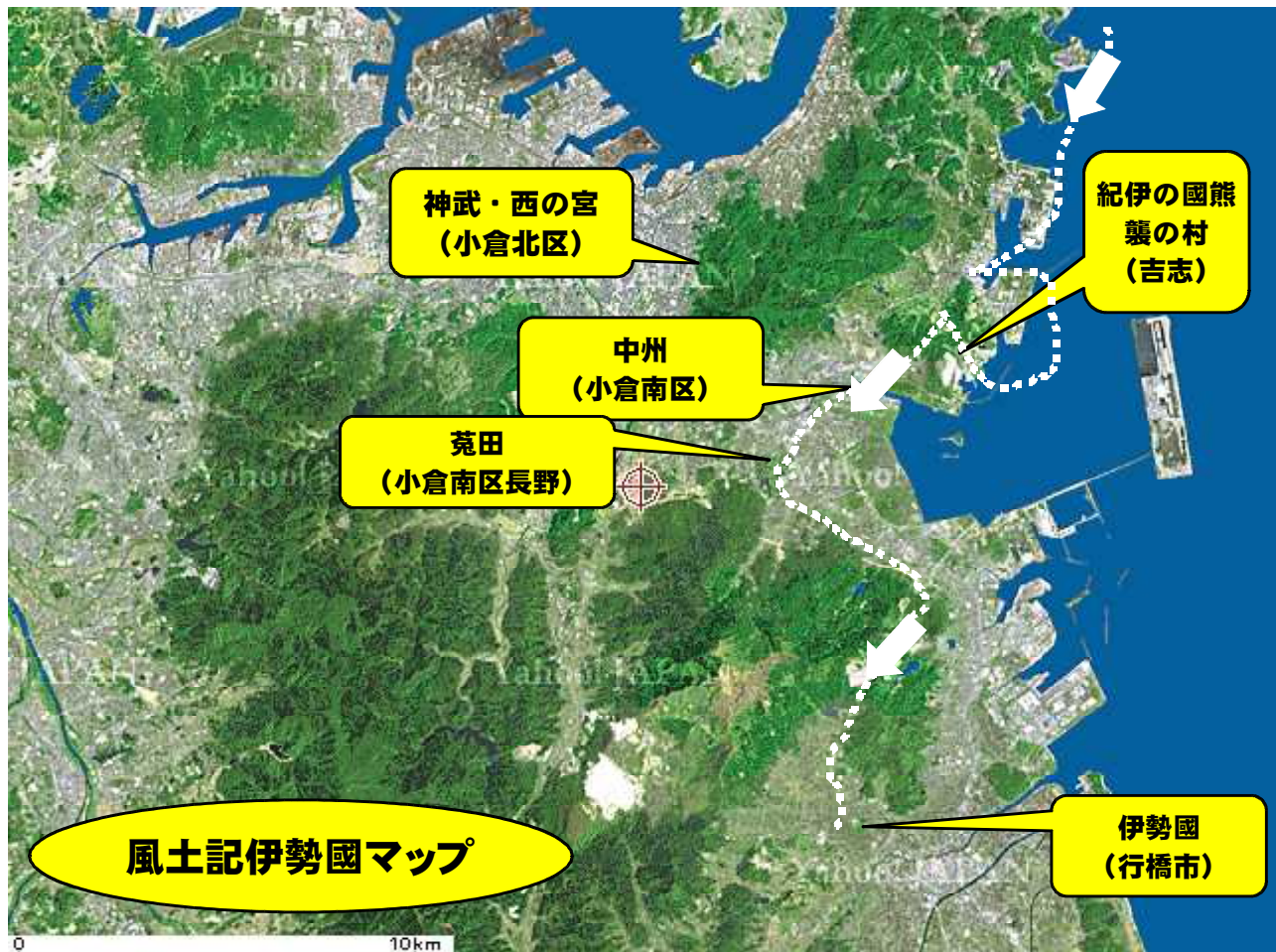
さらに、「伊勢」を特定するために、「伊勢國風土記」を読んでみよう。「伊勢風土記」とは三重県伊勢の風土記なのか。

伊勢の國の風土記に云わく、夫れ伊勢の國は、天御中主尊の十二世の孫、天日別命の平治けし所なり。天日別命は、神倭磐余彦の天皇、彼の西の宮より此の東の州を征ちたまひし時、天皇に随ひて紀伊の國の熊襲の村に到りき。時に、金の鳥の導きの随に中州に入りて、菟田の下縣に到りき。天皇、大部の日臣命に勅りたまひしく、「逆ふる輩、イコマの長牒を早く征ち罰めよ」とのりたまひ、亦、天日別命に勅りたまひしく、「天津の方に國あり。其の國を平けよ」とのりたまひて、即ち標の劍を賜ひき。天日別、勅を奉りて東に入ること幾百里なりき。其の邑に神あり。名を伊勢津彦と曰へり。

ここに、「伊勢」の国名の由来となった「伊勢津彦」が登場する。神武の武将・天日別命が「伊勢津彦」に國譲りを迫る。断る「伊勢津彦」を武力で攻め殺そうとした時、「吾が國は悉に天孫に献らむ」と云い、「証拠は何か？」と迫る天日別命に「八風を起こして海水を吹き、波浪に乗りて東に入らむ」と答える。

これが、「伊勢の神風」の説話である。神武東征は、伊勢國風土記が伝えるように、「東の州（くに）」への征服譚である。その「東の州（くに）」とは小倉南区である。初戦に敗れた神武は一旦

退却して、「紀伊の国」の「熊襲の村」に入った。「紀伊の国」とは現在の吉志である。神武の命令を受けた天日別命はさらに東に行き、伊勢津彦の國に至った。そこが「伊勢國」だった。天日別命は先陣をきて、「伊勢國」を征服するように命令を受けたのであった。「菟田（小倉南区）」から「倭國（香春町）」への東征コース上に「伊勢國」は存在した。故に神武は、「伊勢國」の征服を命じたのである。「伊勢國風土記」とは行橋市の風土記である。



＜伊勢國風土記の景行天皇＞

今、私たちは、行橋市＝伊勢という認識に立っている。行橋市には景行天皇の足跡が残る。行橋市の「勝山御所」は景行天皇の「行宮（かりみや）」だったといわれる。行橋市には勝山の地名が多く残っている。景行天皇が行橋市に実在したことはまちがいない。

では「伊勢國風土記」に景行天皇の足跡が残っていなければならない。行橋市＝伊勢が真実ならば、行橋市の景行＝伊勢國の景行である。

「伊勢國風土記」に景行天皇の記録が残っている。景行は「伊勢の的湍」を訪問し、歌を歌っている。

伊勢國風土記 的形湍

風土記に云はく。的形の湍は、此の湍の地形、的に似たり。困りて名と為せり。今は已に跡絶えて江湖と成れり。天皇、濱邊に行幸して歌ひたまひしく、

ますらをの 獵矢たばさみ 向ひ立ち 射るや的形 濱のさやけさ

「伊勢國風土記」とは行橋市、九州天皇家の「伊勢國」の風土記である。景行天皇は「伊勢國の的形湍」を訪れている。残念ながら、この「的の形」をした入り江が行橋市の何処なのか、特

定出来ないが、行橋市の「勝山御所」に居た景行が訪ねた「伊勢の的形浦」とは行橋市の「的形浦」である。

＜九州天皇家の「近江」＞＜九州天皇家の「美濃」＞

垂仁紀の天照大神の遷居の記事に、「菟田」「近江」「美濃」「伊勢」が登場する。

垂仁25年3月10日、天照大神を豊稻（とよすき）入姫命より離ちまつりて、倭姫命（やまとひめのみこと）に託（つ）けたまふ。ここに倭姫命、大神を鎮め坐（ま）させむ處を求めて、菟田の笹幡（さはた）に詣る。更に遷りて近江國に入りて、東（ひがしのかた）美濃を廻（めぐ）りて、伊勢の國に到る。時に、天照大神、倭姫命に教へて曰はく、「是の神風の伊勢國は、常世（とこよ）の浪の重浪（しきなみ）帰（よ）する國なり。傍國（かたくに）の可怜（うま）し國なり。是の國に居らむと欲（おも）ふ」とのたまふ。故、大神の教え随（まま）に、其の祠（やしろ）を伊勢國に立てたまふ。因りて齋宮（いはひのみや）を五十鈴の川上に興（た）つ。是を磯宮（いそのみや）と謂う。則ち天照大神の始めて天より降ります所なり。

垂仁紀に基づいて、「近江」「美濃」「伊勢」の位置関係を見てみよう。「近江國」の東が「美濃」である。現代地図では岐阜県美濃は東ではなく、滋賀大津の東北である。細かいことはいいのではないかと、みる向きもあろうが、滋賀県大津から岐阜美濃までは190kmある。垂仁紀は、「近江」から、すぐ東隣の「美濃」を通過して、「伊勢國」に着いたと読むべきである。垂仁紀は、「近江國」「美濃國」「伊勢國」は國境を接していた国々だった認識している。もし、垂仁紀のこれらの國が滋賀大津、岐阜美濃、三重県伊勢だと考えると、これらの都市の間には多くの都市が存在する。奈良から琵琶湖大津に行く際、宇陀だけが存在するのではない。それどころか、宇陀よりももっと大きな都市が存在する。だが、垂仁紀は、「宇陀」「近江」「美濃」「伊勢」の間の国は一切書いていない。つまり、九州天皇家の「宇陀」「近江」「美濃」「伊勢」は境を接していたのである。

天照大神は遷居の際、「菟田」－「近江國」－「美濃」－「伊勢國」のコースをとった。この「菟田」は神武が戦った「菟田（小倉南区長野）」である。「近江國」は人麿が「淡海（の）海」と詠った曾根の干潟、小倉南区である。「美濃」とは「河内の美努」と書かれた「河内（小倉南区）の美濃（美努）」である。

「美濃」について、「人麿秘密抄」が更に明確に、「石見國美濃郡」と記録している。人麿の故郷である九州天皇家の「石見國」に九州天皇家の「美濃郡」が存在した。

人丸秘密抄

石見國美濃郡戸田郷小野といふ所に語家命（かたらひ）といふ民あり。ある時後園柿樹の下に神童まします。立よりとへば、答へて曰く。われ父もなく母もなし、風月の主として敷島の道をすると。夫妻悦てこれを撫育し、後に人丸となりて出仕し和歌にて才徳をあらはし玉へり。

九州天皇家の「石見國」とは苅田町である。天照大神の遷居の時のコースは、「小倉南区長野」～「小倉南区曾根」～「苅田町」となる。次が「伊勢國」である。九州天皇家の「伊勢國」の位置は小倉南区から苅田町へ進み、さらに南に下った所となる。苅田町の南は行橋市である。ここが「伊勢」である。天照大神は行橋市について語っている。

是の神風の伊勢國は、常世（とこよ）の浪の重浪（しきなみ）帰（よ）する國なり。傍國（かたくに）の可怜（うま）し國なり。是の國に居らむと欲（おも）ふ。

神風で有名な伊勢國は常世の國（愛媛県か？）からの波が打ち寄せる國である。西は山で、東は海に面した美しい國である。私はここに住みたい。

天照大神は人里離れた辺鄙な場所に住みたいと云ったのではない。最も繁栄している國の中心に住みたいと願ったのである。行橋市はそのような豊かな土地であった。天照大神が新たな住居（宮）を求めて旅をしたコースは神武が歩んだコースと全く同じである。神武も天照大神も小倉南区の曽根干潟に広がる淡海を見ながら国道10号線を南下していた。「近江國」と「石見國」と「伊勢國」は一つの街道で順次結ばれていたのである。

＜九州天皇家の「伊賀國」＞

「伊勢國」とは行橋市である。ついでに「伊賀國」も探しておこう。逸文「伊賀國風土記」がその場所を示している。

伊賀國號（一）

伊賀の國の風土記。伊賀の國は往昔、伊勢の國に属きき。大日本根子彦太瓊の天皇の御宇、癸酉のとし、分ちて伊賀の國と為しき。本、此の號は、伊賀津姫の領る所なりければ、仍りて郡の名と為し、亦、國の名と為せり。

「伊賀」の國は元々「伊勢國」に属していた。しかし、孝靈天皇の時代に、分けて「伊賀國」とした。本来は伊賀津姫が統治していた國だ。故に「伊賀」という地名となった。伊賀國風土記の記録は現在の伊賀ではない。「伊賀」は伊賀津姫が統治していたから、「伊賀國」という名前である。女王の名は「伊賀津」である。「伊賀津」とは「伊賀の湊」の意である。伊賀津姫が治めていた國は港を支配する國だったのである。現在の三重県伊賀には港はない。

行橋市の周防灘に面した國が「伊賀國」だったと思われる。「伊賀」の国名について風土記はもう一つ記事を残している。

伊賀國號（二）

伊賀の國の風土記。伊賀の郡。猿田彦の神、始め此の國を伊賀の加佐波夜の國に属けき。時に二十余萬歳此の國を知れり。猿田彦の神の娘、吾娥津（あがつ）媛命、日神之御神の天上より投げ降り給ひし三種の寶器の内、金の鈴を知りて守り給ひき。其の知り守り給ひし御斎の處を加志の和都賀野と謂ひき。今時、手柏野と云ふは、此れ其の言の謬れるなり。又、此の神の知り守れる國なるに依りて、吾娥の郡と謂ひき。其の後、清見原の天皇の御宇、吾娥の郡を以ちて、分ちて國の名と為しき。其の國の名の定まらぬこと十余歳なりき。之を加羅具似と謂ふは虚國（むなしくに）の義なり。後、伊賀と改む。吾娥の音の転れるなり。

この「伊賀」の國風土記もまた多くのことを私たちに教えてくれる。「伊賀」という国名はこの地を統治した猿田彦の娘、「吾娥津（あがつ）媛命」の名前に由来している。「伊賀の國」で「吾娥津（あがつ）媛命」が守っていた神器が金の鈴だった。天照大神からもらったこの鈴を祀った神社が「伊賀」にあった。

垂仁紀の天照大神が遷居する際、その場所を求めて「宇陀（小倉南区長野）」－「近江（小倉南区曽根）」－「美濃（苅田町）」－「伊勢（行橋市）」と尋ね歩いた理由がここにも示されている。かつて自分が与えた鈴を祀った「吾娥津媛」の神社が「伊賀」にあったからである。この時、「伊賀」はまだ「伊勢」の一部だった。故に、「伊賀」の神社は「伊勢神社」と呼ばれていたであろう。

清見原の天皇（天武）の時代に「伊勢」より独立した。独立以前は「伊勢國の吾娥の郡」と云った。この「吾娥（あが）」が訛って、「伊賀（いが）」となったという訳である。

＜九州天皇家の伊勢神宮＞

九州天皇家の伊勢神宮はどこに存在したのであろうか。

其の祠（やしろ）を伊勢國に立てたまふ。因りて齋宮（いはひのみや）を五十鈴の川上に興（た）つ。是を磯宮（いそのみや）と謂う。則ち天照大神の始めて天より降ります所なり。
（日本書紀垂仁天皇）

日本書紀垂仁紀の記述では「齋宮（いはひのみや）」は、河上にあり、名前は「磯宮」である。伊勢國風土記には神宮についての記録がある。

＜瀧原神宮＞

伊勢の國の風土記に曰はく、倭姫命、船に乗りて渡會の上河に上りまして、瀧原の神の宮を定めたまひき。

＜宇治郷＞

風土記に曰はく、宇治の郷は、風早の伊勢の國渡會の郡の宇治の村の五十鈴の河上に、宮社を造りて太神を齋き奉りき。是に因りて、宇治の郷を以ちて内の郷と為しき。今は宇治の二つの字を以ちて郷の名と為す。

＜度會・佐古久志呂＞

風土記に曰はく、渡會と号くるは、川に作る名のみ。五十鈴は、神風の百船の渡會の縣、佐古久志呂宇治の五十鈴の河上と謂ふ。皆、古語に因りて名づくるなり。さこくしろは河の流れ通りて、底に通る儀なり。

＜五十鈴＞

五十鈴と曰ふは、風土記に云はく、是の日、八小男・八小女等、此にり逢ひて、惣樹接はりき。因りて名と為す。

考察

- ① 瀧原神宮は船に乗りて渡會の上河に上ったところにある。奈良宇陀から三重県伊勢に向かう場合は陸路である。海路ではない。故に「存疑」と注が付けられている。ところが、小倉南区から南下して行橋市に至るコースでは海路を使うことができる。逸文・「伊勢國風土記」は九州天皇家「伊勢（行橋市）」の記録である。
- ② 度會・佐古久志呂には「神風の百船の渡會の縣」と行政区には、縣が使われている。縣は九州の支配国「倭國（キコク）」の行政区名である。宇治郷の記録には「伊勢の國渡會の郡の宇治の村」と行政区名には「郡」が使われている。「郡」という行政区名は九州天皇家の行政区である。「伊勢風土記」には、「倭國（キコク）」の「渡會縣」と九州天皇家の「渡會郡」と二つの行政区表記がある。「倭國（キコク）」の「縣」が古く、九州天皇家の「郡」が新しい。
- ③ 日本書紀垂仁紀一に云はく

天皇、倭姫命を以て御杖として、天照大神に貢奉ちたまふ。是を以て、倭姫命、天照大神を以て磯城の嚴檜の本に鎮め坐せて祀る。然して後に、神のおしえの隨に丁巳の年の冬十月の甲子を取りて、伊勢國の渡遇宮に遷しまつる。

ここでは天照大神は「磯城の嚴檜の本」に祀られた。しかし、神の教えがあつて「伊勢國」の「渡遇宮」に遷されたという。「磯城」とは神武が戦った「倭國（キコク）」の王、「磯城の八十梟師」が住んでいた「磯城（香春町）」である。ここから「伊勢國」の渡遇宮に遷宮した。宮は川を渡った中州にあったと思える。

- ④ JR行橋駅の東に宮市町があり、西に西宮市がある。これらの町は長峽川、今川の上流に位置する。九州天皇家「伊勢神宮」は行橋市の中心部に存在したと思われる。



「層富縣」から「狭井河」へ 神武皇后は狭井河の娘

小倉南区長野での戦いに勝利した神武は苅田町から行橋市に進んでいった。神武一行は周防灘に面した豊かな土地、行橋市（層富縣）の豪族と戦い勝利して「倭國（キコク）」まで侵攻した。その行程に「狭井河」があった。神武の皇后となる「伊須気余理比賣」は「狭井河」の豪族の娘だった。二人が結婚した縁はすでに東征路の中で芽生えていたのである。

神武は東征を終えて「畝傍山」の東南に都を定めた。その後、「狭井河」の娘を皇后に迎えた。「狭井」とは山百合（狭井・佐韋）の名前である。「狭井河」とは福岡県京都郡みやこ町を貫流する犀川（現在の名は今川）である。「狭井」の名前は、みやこ町の御所ヶ谷神籠石山城の東南、犀川駅の周辺の地名、犀川木山、犀川花照などに残る。

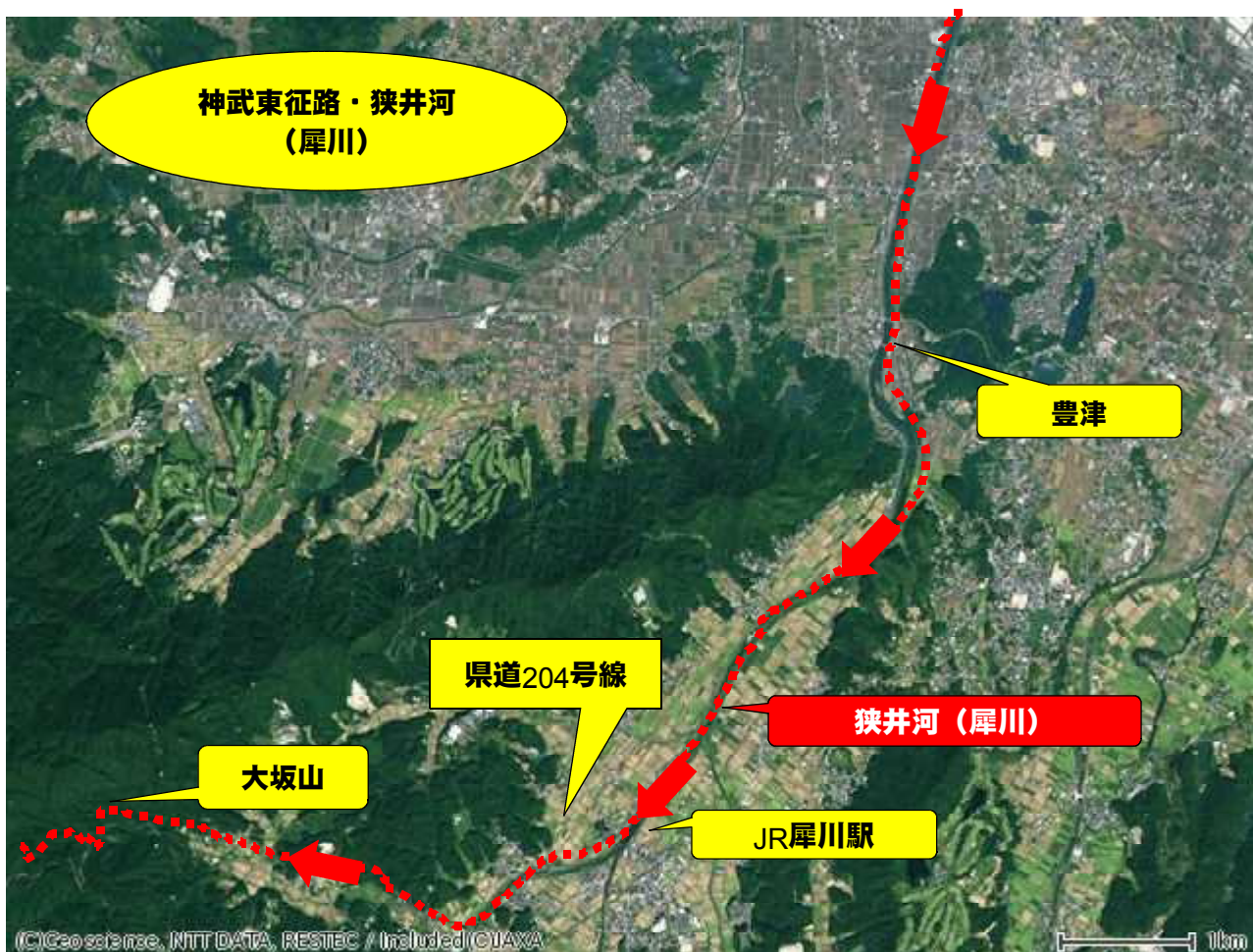
神武は山百合が咲き誇る「狭井河（今川）」の河邊の「伊須気余理比賣」の家で一夜を過ごした。神武はその思い出を歌にしている。

葦原の しけしき小屋に 菅畳 いや漬敷きて 我が二人寝し

「狭井河」での戦闘記録はない。神武に友好的な豪族だったと思われる。神武が皇后を迎えた犀川は航空写真で見ると東西を山で囲まれた盆地である。田畑も多く見られる。この地も古代か

ら栄えてきた豊かな古代国家だったのあろう。神武はこの土地の豪族の娘を皇后として迎えた。

盆地の香春・田川にあって欲しいものは海である。香春・田川では海産物は直接手に入らない。だが、塩も魚も必要である。そのためには海に出る途上の國を押さえなくてはならない。神武が海への行路にある犀川の娘を皇后に迎えたのは賢明であらう。神武は聡明な王であった。



「狭井河」から「倭國」へ

神武東征の目的は企救半島・吉志へ侵入であった。そこが「安藝國」で神武が侵略を決意した國だった。しかし、神武の東征はそこで終わらなかった。神武を待ち受ける強力な熊襲の王が存在したからである。

竹馬川の河口に開けた肥沃な土地・小倉南区、ここは豊かな土地であった。この地を支配していたのは古代九州全域を支配していた熊襲の王だった。熊襲の國は「縣」という行政制度を確立していた超文明国家だった。神武は二人の熊襲の王「八十建（やそたける）」と戦い勝利した。

その後、神武は小倉南区から国道十号線（当時は山の道であらう）を南下、次の戦いは、「層富縣（行橋市）」の神官「居勢の祝」であった。彼もまた強力な豪族だったが、本国の二人の王が倒された後では、大きな戦いとはならなかった。

小倉南区、行橋市を制圧した神武にはもはや大きな敵はいなかった。行橋市から神武は進路を西にとり、熊襲の本国「倭國（キコク）」を目指した。行橋市から大坂山を越え、やがて美しい盆地に到達した。そこが「倭國（香春町）」であった。「倭國（香春町）」での「高尾張邑」で戦いが最終戦となった。「高尾張邑」とは「倭國（香春町）」に存在した集落である。この邑は後に倭健の説話にも登場する。倭健は「尾張國の美夜受比賣」の家で有名な月経歌を詠む。

ひさかたの 天の香具山 利鎌に さ渡る鰯 弱細 手弱腕を 枕かむとは 我はすれど
さ寝むとは 我は思へど 汝が著せる 襲の裾に 月立ちにけり

「高尾張邑」は現在の「尾張名古屋」ではない。「倭國の高尾張邑」、つまり香春町に存在した小さな集落である。「天の香具山」とは幾度も歌われた香春町の香春一ノ岳である。

神武「畝火の白檮原の宮」

全てに勝利した神武は、この地に宮を建造した。

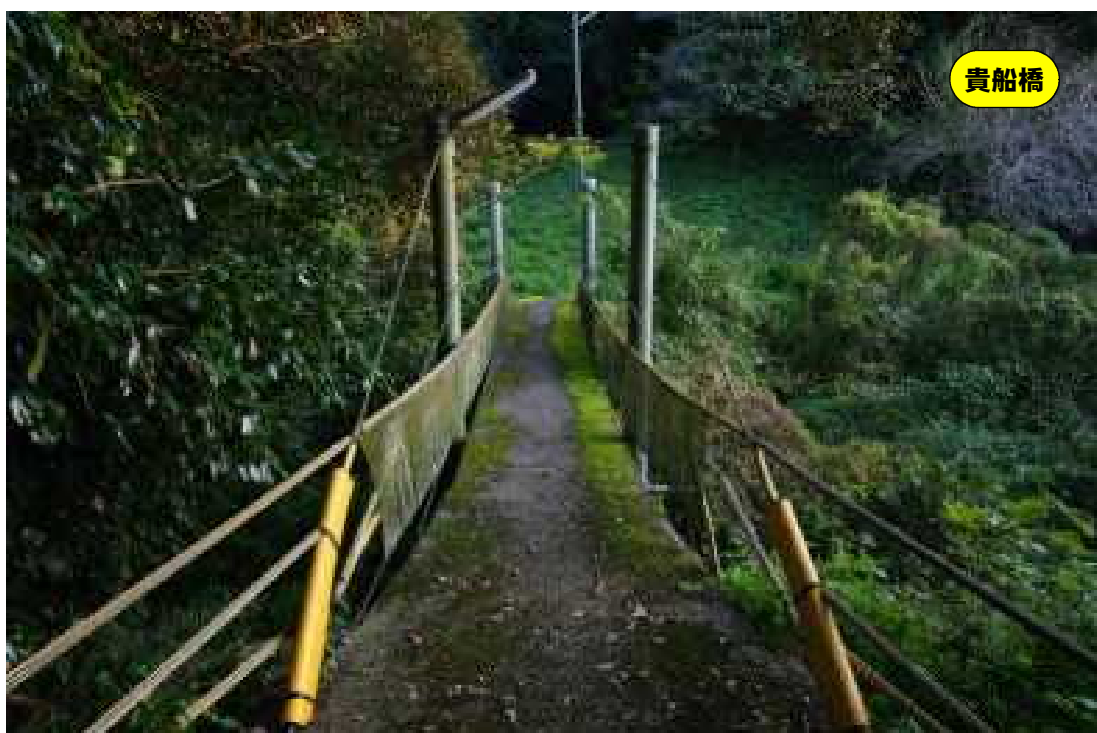
且當に山林を披き拂い、宮室を經營りて、恭みて寶位に臨みて、以って元元（おほみたから）を鎮むべし。上は答乾靈（あまつかみ）の國を授けたまひし徳に答へ、下は皇孫の正を養ひたまひし心を弘めむ。然して後、六合を兼ねて以って都を開き、八紘を掩ひて宇（いへ）にせむこと、亦可からずや。觀れば夫の畝傍山の東南の檮原の地は、蓋し國の塙區（もなかのくしら）か。治るべし。

神武が宮（帝宅）を構えたのは「畝傍の山の東南」の丘である。白檮の山林を切り開き、宮を造営した。故に「畝火の白檮原の宮」と呼ばれた。「畝火」とは香春町の香春岳である。まさに畝の形をしている。「畝傍の東南」は現在では「香春町高野」という地名である。ここに神武は2000年ほど前に帝宅を建てたということになる。その帝宅の址は現在も残っているだろうか。

香春町高野の集落を登り切ったところに車が5台ぐらい駐車できる空き地がある。そこに短い吊り橋が架かっている。「貴船橋」である。橋の下には小川が流れ、谷は深い。橋を渡れば平らな土地があり、そこに古い神社がある。貴船神社である。

貴船神社が建つ場所は防御面で優れている。川がこの地の周りを流れ、まるで深い濠のようである。攻め入るとしたら下のほうから攻め上がるしかない。容易に敵を撃退できるであろう。

敵地に侵入した神武が帝宅を構えたとしたら誠に相応しい場所である。神武の帝宅は香春町高野の貴船神社の敷地に建てられていた。ここが神武畝火の白檮原の宮址である。正面に「畝傍山（香春岳）」が見える。





神武
畝火白檣原宮址

「畝傍の山」（香春岳）

「畝傍山」（香春岳）は神武の都の象徴であった。この三連山の一つ、香春一の岳は、「天香具山」として、多くの歌に詠われている。九州天皇家最後の天皇が持統である。持統は奈良天智天皇の皇女である。持統は13歳の時、奈良から遙々香春町の天武の元に嫁いできた。その異国の夏の訪れを故郷奈良の夏の訪れより早く感じた。その驚きが歌となった。この国の人々は、もう夏の白い衣を干している。ああ、もう夏なのだ。

万葉 28番

春過ぎて 夏来たるらし 白妙の 衣乾したり天の香具山



神武東征路・畝傍山
(香春岳)

この山を奈良の畝傍山に移し替えて、神武は奈良に東征したのだと、近代の研究者が強弁しようとも、真実を隠し通すことはできない。

神武に味方した「菟田縣」の長官・「弟狛」は「倭國の磯城邑に磯城の八十梟師有り」と神武に伝える。「倭國（キコク）」とは古代九州を支配した熊襲の国家である。九州全土は関門海峡周辺の「天（あま）王朝（大八洲）」を除いて熊襲の支配下にあった。

神武が戦った古代国家は「倭國（キコク）」と云った。そのことを「弟狛」の言葉は明らかにしている。神武が征服した香春・田川は「倭國（キコク）」という国名で知られていたのである。

神武は建国した國を、「ヤマト」と呼んでいる。「ヤマト」という国名には「倭國」という漢字が使われている。「倭國」は「キコク」または「ワコク」と読み、「ヤマト」とは読めない。なぜ、神武の國は「ヤマト」と呼ばれたのか。「ヤマト」の意は「ミナト」の対である。ミナトは「水の戸」である。伊邪那岐命が統一した大八洲は、全て、「水の戸（港町）」であった。神武は初めて内陸の「倭國（香春・田川）」の中に自らの國家を樹立した。従って、「ヤマト（山の戸）」と呼んだのである。そして「倭國」という表記で「ヤマト」と読んだのである。

神武が皇后に迎えた女性は「倭國（香春・田川）」の東、「仲哀峠」を越えた「犀川」の王女であった。「倭國（香春・田川）」に都を開き住み着いた神武の後継者たちも「倭國」の豪族の娘を妻としている。日本書紀は「綏靖」「安寧」「懿徳」「孝昭」「孝安」が娶った妻の名前を記録している。

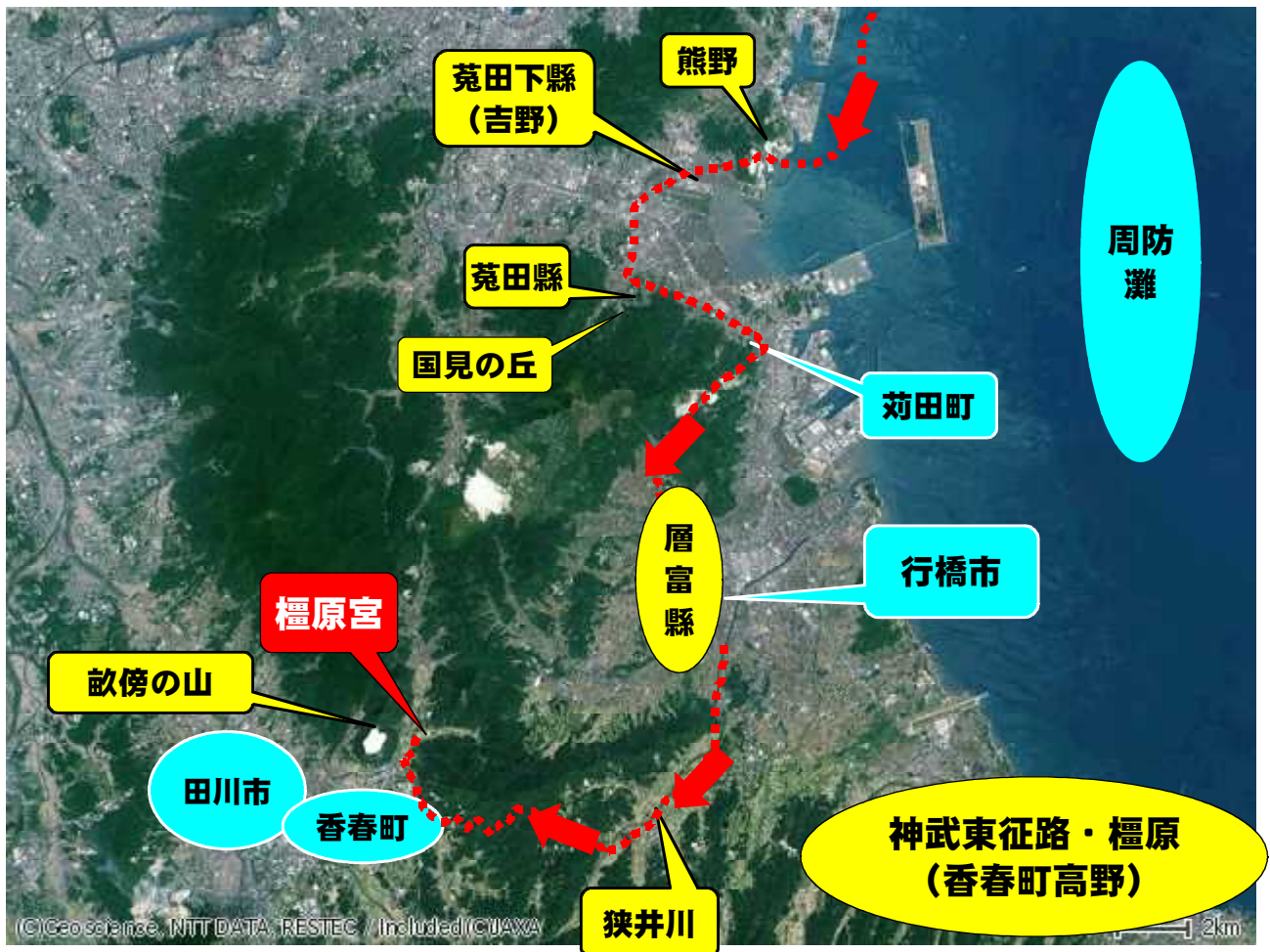
- ・2年の春正月に、五十鈴依媛を立てて皇后とす。一書に云はく、磯城縣主の女川派媛なりといふ。一書に云はく、春日縣主大日諸が女糸織媛なりといふ。（日本書紀 綏靖紀）
- ・3年の春正月の5日に、淳名底仲媛命を立てて、皇后とす。一書に云はく、磯城縣主葉江が女川津媛といふ。一書に云はく、大間宿禰が女糸井媛といふ。（日本書紀 安寧紀）
- ・2年2月の11日に、天豊津媛命を立てて皇后とす。一に云はく、磯城縣主葉江が男弟猪手が女泉媛といふ。一に云はく、磯城縣主太眞稚彦が女飯日媛といふ。（日本書紀 懿徳紀）
- ・29年の春正月の3日に、世襲足媛を立てて皇后とす。一に云はく、磯城縣主葉江が女淳名城津媛といふ。一に云はく、倭國の豊秋狹太媛が女大井媛といふ。日本書紀 孝昭紀）
- ・26年春2月14日に、姪押媛を立てて皇后とす。一に云はく、磯城縣主葉江が女長媛といふ。一に云はく、十市縣主五十坂媛といふ。（日本書紀 孝安紀）

「一書」では、綏靖、安寧、懿徳、孝昭、孝安は「倭國」の「磯城縣主」の女（娘）と結婚している。「磯城縣」は「倭國の磯城邑に磯城の八十梟師有り」と、弟狛が云った「磯城」と同じで、香春に存在した古代集落である。神武は「倭國」の王二人を倒して東征を成し遂げた。「倭國」の王の一人が「磯城の八十梟師」であった。定住した神武の子孫が妻としたのは、「磯城縣主」の娘である。神武の子孫が妻とした女性は、神武が倒した「倭國」の磯城の八十梟師の縁者だったのである。

神武紀には、「縣」が登場する。この行政区を定めた国家が「倭國」である。「倭國」の王は「八十梟師（ヤソタケル）」と名乗った熊襲の王である。彼らは神武の時代、九州のほぼ全土を支配していた。その一つが香春町、田川市に存在した「倭國」である。

「倭國」の王は神武の侵入を知り、「菟田縣」の「國見の丘」で待ち受けた。「國見の丘」とは長野城山である。この城山は小倉南区随一の堅城である。神武は「國見の丘」に立て籠もる「倭國」の王を巧妙な作戦で破る。そして「菟田縣（小倉南区）」から「層富縣」へ転進した。「層富縣」とは行橋市に存在した「倭國」の地方行政区であった。この「縣」では三人の畝を倒し、そのまま本国の「倭國（香春町）」へと侵入した。「倭國」の二人の熊襲の王はすでに「國見の丘」で神武によって倒されていた。神武は「倭國」を手に入れた。そして、「畝傍山（香春岳）」の東南の高野に帝宅をつくり、國家の樹立を宣言したのである。ここに九州天皇家が始まる。

神武・橿原への路



古代世界の真実

戦後、津田左右吉は、神武東征は史実ではないとした。確かに、神武の関西東征は史実ではなかった。関西東征はあり得ない虚構と判断した津田左右吉の古事記解説は間違っていなかったのである。しかし、もう少し深く読むべきであった。神武東征は彦島一企救半島吉志一小倉南区一行橋市一香春町に到る熊襲戦として実在した。虚構だったのは、神武東征を宮崎から奈良への東征と読んだ近代の研究である。

日本書紀編纂者は神武の言葉をそのまま記録していた。私たちは神武のこれらの言葉によって、思いがけない真実に出会うことができた。日本書紀は神武の言葉の中に古代世界の映像記録を収めていた。神武東征とは古代九州を支配した熊襲との戦いであった。今に九州各地に残る古墳はこの王朝の王墓である。東征は苦戦の連続であった。神武は「国見の丘」の戦いの後、歌を歌った。

又、兄師木、弟師木を撃ちたまひし時、御軍暫し疲れき。爾に歌曰ひけらく、
楯並めて 伊那佐の山の 樹の間よも い行きまもらひ 戦えば 吾はや飢ぬ
島つ鳥 鵜養が伴 今助けに來ね
とうたひき。

(古事記神武)

神武の歌には「伊那佐の山」が歌われている。「伊那佐」は出雲神話に登場するの地名である。天孫降臨に先立って二人の武将が「天（あま）國」から出雲に遣わされた。建御雷神と天鳥船神は「出雲の伊那佐の小濱」に降って、大國主神に「葦原中國を譲れ」と迫った。

この出雲神話の「伊那佐」とはどこか。出雲「伊那佐」が島根県と仮定すれば、神武東征「伊那佐」も出雲ということになる。これは困る。神武「伊那佐」が奈良だとすると出雲伊那佐が奈良となる。これもまた困った結論になる。「出雲神話舞台は島根県」「神武東征は奈良」このどちらの歴史認識もまちがいである。

神武が歌った「伊那佐の山」と「出雲神話の伊那佐」とは同じ場所である。神武東征の「伊那佐の山」は「兄師木、弟師木」が立て籠もった要害である。この熊襲の王を神武は倒した。この山が後に「國見の丘」と呼ばれた。「伊那佐の山（國見の丘）」がどの丘か、すでに判明している。小倉南区長野城山である。

出雲神話の建御雷神と天鳥船神が降り立った伊那佐も小倉南区長野である。「伊那佐」は小倉南区長野に存在した。小倉南区が神武東征の舞台、出雲神話の舞台なのである。

古事記・日本書紀に神武の生の言葉、歌が記録されている。神武の歌、神武と対話した人々の生の言葉が伝わる。歌・言葉の力は恐るべし。ほとんど正確に伝わってきたこれらの数々の歌・言葉は、神武奈良東征という虚構の近代認識を粉碎してしまった。

神武東征・建国は九州東北部である。「浪速」「曲浦」「蜺蛉の砥嘗め」「秋津嶋」「畝傍山」「狭井河」「伊那佐の山」等は、全て、九州東北部の地理である。2000年程前に神武が見た風景はこの風景であった。

神武が渡った「浪速の海」は関門海峡の海である。まさに浪が速い。その海を航海する術を心得ていた漁師と出会った「速吸之門」とは彦島小戸である。傷ついた兄が手を洗った「血沼の海」とはきらめく周防灘である。戦時にもかかわらず、見学に訪れた「吉野の逆巻く河」は満ち潮に流れ込む「竹馬川」である。「居勢（いせ）」と名乗る豪族と戦ったのは、九州天皇家の「伊勢」、行橋市である。「倭國」での最終戦に勝利した神武が宮を構えたのは「畝傍山（香春岳）」の東南、白檮の木が茂る香春町の高野である。皇后に迎えた女性と一夜を過ごした白百合の咲き誇る「狭井」とはみやこ町犀川である。生まれた神武の三人の子どもたちが大きくなるの見守った「畝傍山」とは香春岳である。

神武が見た世界を私たちは今はっきりと見ることができる。

神武香春建国の意味

神武は紀元前一世紀の半ばを生きた弥生人である。

神武は香春町に国家を樹立した。

これが歴史的事実である。この史実が私たちにさし示す意味は重い。重いが、その意味を明確にしなければならない。解明の重圧に堪えていかなければならない。

神武天皇家は奈良に始まる。今やこの認識が崩壊する。神武天皇家奈良実在という歴史観は全て崩壊する。そして、神武天皇家の奈良実在を土台として構築されている全ての世界認識は全て瓦解する。神武天皇家奈良実在を構成要件とする全ての世界認識も全て瓦解する。

- (1) 神武を始祖とする一つの天皇家は北東九州に実在した。神武をはじめとして仁徳、雄略等々の天皇は奈良大阪に住んだことはなく、九州に住んでいた。

万葉2番歌高市岡本宮天皇も九州天皇家の天皇である。歌われた「天の香具山」は奈良香具山を詠ったものではなく、香春一ノ岳を詠ったものである。

人麿が詠んだ「持統の吉野の宮」とは、奈良吉野の離宮ではない。小倉南区に存在した九州天皇家歴代の大宮であった。壬申の乱を起こした天武は奈良に住んでいたのではなく九州に居た。その妻持統は13歳の時、九州に居た天武の元に妃としてやって来た。

持統の生涯の前半は天武と共に九州にあった。だが持統は夫天武の死後、奈良に戻って天皇位に就いた。この王朝は九州天皇家と天智などの奈良天皇家を統合した新しい王朝となった。

- (2) 古代奈良・大阪に実在した王朝は九州天皇家とは異なる王朝だった。古代関西の国土をきりひらき、人々の生活を安定させ豊かな暮らしを保障した国家は神武天皇家ではなかった。例えば大阪府寝屋川市、門真市に遺跡が残る「茨田（まんだ）の堤」。この困難な治水工事を行ない、豊かな田園地帯を作り出したのは秦氏だった。秦氏は九州天皇家の豪族ではなく、古代関西を統治した国家、日本國天皇家の豪族であった。
- (3) 関西各地に多くの伝承が残る聖徳太子。仏教を導入し、人々の精神世界を開明した聖徳太子は神武天皇家の王ではなかった。関西の日本國天皇家の天皇であった。十七条憲法。国家の上級官僚のあるべき姿を示すこの憲法をもった国家は神武天皇家の国ではなかった。最古の木造仏教寺院・法隆寺。世界仏教界の至宝・法隆寺。この寺は神武天皇家とは無縁の寺であった。
- (4) 関西に現存する数多くの古墳。神武天皇陵から天武天皇陵まで歴代の天皇陵と比定されている陵は全てこれらの天皇の陵ではない。世界遺産に登録されんとする「仁徳陵」。この陵は仁徳天皇の陵ではない。古代関西に繁栄した日本國天皇家の陵墓である。

これが真実である。真実は私たちが受け入れる、受け入れないにかかわらず、真実である。